

キリストを信じ 聖霊によって新生する

ヨハネ3章1～15節
2021年1月17日
松田 基子 師

神様は人類を罪による永遠の滅びから救うために、罪の無い神の御子イエス様を、人の世に送られました。そこに至るまでには長いながい時間と準備がありました。アブラハムとの契約から、イスラエルの民が神様の民に選ばれ、神様はイスラエルを御自身の民に育てるために、モーセを通して律法をお与えになりました。律法には神様のご意志による教えと、戒めが記されており、人間の守るべき道を教えると共に、祭儀規定、社会法規、種々の勧告などが成されています。

驚くべき事に、イスラエルは国が滅ぼされてもこの律法を決して手放すことはありませんでした。しかし、イエス様がこの世に来られた時代、律法は字面に囚われた律法主義に陥って、硬直化していました。彼らは律法を守る事に依って、神様に受け入れられ、神の国に迎えられと思ひ込んでいました。

その表れとして、マタイ福音書19章16節には、青年がイエス様に、

「先生、永遠の命を得るには、(つまり、神の国に迎えられるには)どんな善いことをすればよいのでしょうか。」

と尋ねています。イエス様はそれに対して、

「もし、命を得たいのなら、掟を守りなさい。」

とお答えになりました。青年が、

「どの掟ですか。」

と尋ねますと、イエス様は、

「殺すな、姦淫するな。盗むな。偽証するな。父母を敬え、また、隣人を自分のように愛しなさい。」

と言われました。

そこで青年は、

「そう言うことは皆守ってきました。まだ何か欠けているのでしょうか。」

と尋ねています。するとイエス様は、

「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を

売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積む事になる。それから、わたしに従いなさい。」

とお答えになりました。すると青年は、マタイ19章22節を見ますと、

「この言葉を聞き、悲しみながら立ち去った。沢山の財産を持っていたからである。」

と記されています。

ここには真の意味で、律法を守れない人間の姿が示されています。律法はもちろん、神様を畏れ敬い。人とひととが互いに愛し合い、自然を大切にして行くために、大切なものでした。しかし、この青年だけではなく、人はだれも律法を完全に守ることは出来ないのです。それは神様の前に、罪人であることを自覚させるものでした。人間は律法を完全に守ることは出来ない。人間の努力や頑張りで、神様から神の国に入る合格点を頂く事は出来ないのでした。

そんな人類を救うために、イエス様はこの世に来て下さったのです。しかし、律法の伝統に拠り所を置いていた人々には、その事が分かりませんでした。

さて、イエス様は弟子たちを迎え、働きを初められました。ガリラヤのカナで、弟子たちと共に、結婚式に招待され、水をぶどう酒に変える奇跡を起こして、花婿の窮地を助けられました。と同時に、その奇跡を通して、御自身の使命を証しされました。

その後、一行は過越祭を祝うためにエルサレムへ巡礼に向かっています。そこでイエス様は何と、神殿から商人を追い出して、宮清めをなさいました。その後ヨハネ福音書2章23節を見ますと、

「イエスは過越祭の間エルサレムにおられたが、そのなさったしるしを見て、多くの人がイエスの名を信じた。しかし、イエス御自身は彼らを信用されなかった。それは、すべての人のことを知っておられ、人間についてだれからも証ししてもらう必要がなかったからである。イエスは、何が人間の心の中にあるかをよく知っておられたのである。」

とあります。

世間では、人間離れた事をなす人が現れま
すと、

『この人には神の力が宿っている。』
と、思って、その人を信じ頼ろうとしますが、それ
はどこまでも、自分にとって都合が良い、利益に
なる限りに於いてであって、自分の期待に添わ
なければ、また、離れて行くばかりか、批判者に
変わっていきます。 イエス様はそう言うことを良
くご存知でした。

しかし、ここにそうでない真理を求める人がい
ました。 その人は、3章1節に出て来ます、
ニコデモと言う人です。 この人は、ファリサイ派
に属する、ユダヤ最高議会の議員でした。
ファリサイの語源は、分離した者と言う意味です。
律法を守らない一般の人々から自分達を分離し
て、汚れない様にしたところから、そのように呼
ばれたとされています。 特に、安息日や断食、
施し、宗教的清めを強調して、律法を守ることに
専心しました。 その上で議員になったと言うの
ですから、律法に精通しているだけでなく、社会
的にも、学識、財産、人格など揃っていたと言う
ことでしょう。

そのようなニコデモが、2節を見ますと、
「ある夜、イエスのもとに来て言った。

『ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとか
ら来られた教師であることを知っています。
神が共におられるのでなければ、あなた
のなさるようなしるしを、だれも行うことはで
きないからです。』

と言っています。 ニコデモは真面目で、イスラ
エルの信仰の伝統を重んじ、民の指導者として、
模範的な生き方をしていました。

彼は地方のガリラヤから突然現れて、神様の
愛を語り、愛の業を行い、病人を癒す等の奇跡
を行われたイエス様に対して、冷静に先入観な
しに、神様が働いておられる正しい存在である
ことを判断しています。 多くのファリサイ派の
人々は、イエス様に対して人間的な目で、出自、
身分、学識などで判断して、最初から、敵対関
係に立っていました。

ニコデモはそう言う人達に囲まれていることを
考えながらも、彼はイエス様と会って、信仰の奥

義を聞きたいとの思いに駆られていました。
そこで、世間の目をはばかって、夜、イエス様の
許にやって来たのです。 彼はイエス様に関心
がありましたが、また、世間からの人望も失いた
くはありませんでした。 彼は世間からは信仰深
く、確信に満ちていると思われて居ました。
でも彼の内心は、

『これで神様に良しとされるのだろうか。』
と確信がなかったのです。

その心の不安を抱え、暗い気持ちで、イエス
様から光を得ようと、やって来たのです。
ニコデモは、イエス様が自分に無いものを持っ
ておられる事に気付いていました。 彼は
イエス様に、

「ラビ」

と呼びかけています。 世間ではニコデモこそ、
ラビ、先生という尊称で呼ばれるに相応しい人
でした。 ニコデモにとって、イエス様の教えと奇
跡は、神様がなさっておられる事を、ヒシヒシと
感じさせるものでした。 ニコデモにとって、その
事こそ自分に無い、欠けているものでした。

ニコデモは律法の知識についてはいくらでも
語ることが出来ましたが、神様との交わりを持っ
て居なかったのも、そこに命がありませんでした。
イエス様はニコデモの、神様との交わりが無い信
仰をご存知でした。 そこで、イエス様は3節に、
「はっきりいっておく。 人は、新たに生まれ
なければ、神の国を見る事は出来ない。」
岩波訳では、

「アーメン。 アーメン。 あなたに言う。 人は
上から生まれなければ、神の王国を見る事は
出来ない。」

と言われました。 神の王国と言う意味は、
神様の終末的支配ばかりでなく、今、神様の支
配を受けることを意味しています。

つまり、

「神様との交わりに生きているか。」

と言う事です。

イエス様は神様との生ける関係に生きていな
いニコデモに対して、

『あなたに生まれなければ、上から聖霊の
力によって生まれなければ、神様との
生ける交わり、即ち、神の王国に生きる

ことは出来ない。』
とお答えになりました。

ニコデモにとって、
「新たに生まれる」

と言う言葉は、異教からユダヤ教に改宗するとき
に用いられていた言葉でありました。彼は既に
ユダヤ教の立派な教師でしたから、名も無い
イエス様からそのような言葉を聞かされたことに、
プライドが傷ついたようです。そこで彼は敢え
て、

「年を取った者がどうして生まれる事が出来
ましょう。もう一度母親の胎内に入って生ま
れる事が出来るでしょうか。」

と切り返しています。ニコデモは折角イエス様
の許に来ながら、自分の考えを握りしめ心を閉
ざしてしまいました。

新しい世界を受け入れようとしない。それが
ニコデモに代表される、律法に生きて来た人々
の限界でした。人間は律法を完全に守る事は
出来ないのです。律法は人間に罪を教え、神
様に受け入れて頂く資格はない、神の国に入る
資格は無いことを教えるものです。

そこで、人間は捨てられてしまうのかと言いま
すと、そうではありませんでした。神様は律法
によっては良しと、受け入れられない人間を救う
ために、御子イエス様をこの世に送られたので
す。イエス様によって、神の国が開かれる、神
の国に迎えられる、永遠の命が与えられる、新し
い時代が来たのです。

イエス様はそこで、5 節に

「はっきり言うておく。だれでも、水と霊とに
よって生まれなければ、神の国に入る事は出
来ない。肉から生まれた者は肉である。
霊から生まれた者は霊である。」

と言われました。

神の御子イエス様に依って、もたらされる新し
い世界は、水と霊によって新しい存在に変えら
れる世界です。水は洗礼を表しています。洗
礼はイエス・キリストを神の御子救い主と信じ、信
仰を告白する事です。その告白によって聖霊
は、その人を神の国に属する者に、新しく生ま

れ変わらせて下さいます。肉とは生まれ乍らの
罪深い滅び行く存在の事です。神の国に入
るには、聖霊による新生、新しい存在に変えら
れなければなりません。この様な考えはそれ
までの律法の世界には無かったものです。

そこでイエス様は7節で、

「あなた方は新たに生まれねばならない。
とあなたに言ったことに、驚いてはならない。
風は思いのままに吹く。あなたはその音を
聞いても、それがどこから来て、どこへ行くか
を知らない。霊から生まれた者も皆その通り
である。」

と言われました。風と霊とは、同じプニューマと
言うギリシャ語の訳語です。

「風は思のままに吹く」

と在ります。風の性質はそれを肌で感じ、音を
聞く事が出来ますが、風自体は見えないので、
どこから来て、どこへ行くのかは解りません。
それと同じ様に、イエス・キリストを信じて、信仰
告白した者を、聖霊が神の国に属する者に生ま
れ変わらせられた時、風がその肌で感じ、音を
聞くことが出来るように、内なる心が変わられて、
喜びに満たされ、新生を実感する事が出来るの
です。

しかし、聖霊を自分の内に閉じ込めたり、自
分の思うように動かしたりは絶対に出来ません。
人間は聖霊に支配されるものであり、聖霊は人
間を越えて、全く自由に動き働かれるのです。
ニコデモはどうしても、永い間生きて来た律法の
伝統に立って、イエス様の話を聞いていました
ので、9 節で、

「どうして、そんなことがありえましょうか。」

としか、答える事が出来ませんでした。

イエス様もニコデモに、

「あなたはイスラエルの教師でありながら、こ
んなことが分からないのか。」

と嘆かれました。

ニコデモは、イエス様に魅力を感じ乍らも
イエス様が与えて下さる新しい世界に飛び込ん
で、イエス様の言われた事を体験する事は出来
ませんでした。それは自分の考えに固執し、
イエス様を神の子、救い主とは信じなかったから
です。

そんなニコデモにイエス様は、11節で、
「はっきりいっておく。わたしたちは知っていることを語り、見たことを証しているのに、あなたがたはわたしたちの証を受け入れない。」

と言われました。イエス様はここで、
「わたしたち」

と言っておられますが、

『聖霊による新生を体験した弟子たちを意識して、その事実を訴えておられるのだろう』

と言われています。それでも、ニコデモたちは、その証を受け入れませんでした。

イエス様は続けて12節に、

「わたしが地上のことを話しても、(つまり、現に聖霊によって新しくされ、喜びに満たされる事が起こっていて、それを話しても)信じないとすれば、天上(神の国)のことを話したところで、どうして信じるだろう。」

と嘆いておられます。イエス様はそこで、御自身を証して13節に、

「天から降ってきた者、すなわち人の子の他には、天に上った者はだれもない。」

と言われました。イエス様御自身、天から降って来られたことを証しておられます。

人間誰一人として、自分の力で天に上った人はいません。したがって、

『人間誰一人として天の事は分からないと言う事です。』

こちらからは分からない。そのために御子が天から降って来て、天のことを教えて下さったのです。どうしたら、罪ある人間が、天の国に迎えられる、永遠の命が与えられるのでしょうか。

イエス様は14節、15節で、
教えておられます。

「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。」

モーセが荒れ野で蛇を上げた故事は、民数記21章に記されています。モーセに率いられて、荒れ野を旅したイスラエルは、常に神様に対して、不平不満を言って逆らいました。神様は彼らに炎の蛇を送られました。蛇が民を噛んだので、多くの死者が出ました。民が悔い改めた時、神様はモーセに、

「炎の蛇を造り、旗竿の上に掲げよ。」

と命じられました。蛇に噛まれた者がそれを見上げれば、命を得ると言われ、見上げた者はその通りに癒されたのでした。

それはイエス様の時代に至って、イエス様が人類の罪を負って十字架に上げられ、罪を贖ってくださる。そのイエス様を仰ぎ見る者に、神様の救い、永遠の命が与えられるという予めの型、予告だったのです。

ここにイエス様の十字架の贖いによる、人類の全き救い、永遠の命が与えられることが起こるのです。その事が成就する新しい時代をイエス様はもたらせて下さるのです。イエス様のその御愛によって、私たちは今、水と霊とから生まれ変わらされて、新しい神の国の存在に変えられているのです。この信仰を失わずに、イエス様にしっかり繋がって、御国を目指して歩んで行こうではありませんか。

お祈りを致します。

愛と憐れみに富み給う天の父なる神様
あなた様の御愛は深く、量り難く、罪人の私たちを救うために、御子イエス様を十字架に架けてまで贖って下さいました。

私たちは心から、イエス様を信じます。

聖霊によって御国に属する者に新生させて下さっていることを信じます。

只ただイエス様に繋がって御国への道を歩ませて下さい。

どうぞこの大きな祝福を、一人でも多くの方が得られますよう、私たちの働きを強めてください。

尊い救い主イエス・キリストの

お名前によってお祈りを致します。

アーメン。